短編創作

息子（1）

十市梨夫

省一は辞表を書き終えると、暫くのあいだぼんやり火鉢に手をかざしていた。するとき親はべようぶの如き役割を果たしているという或る作家の言葉がうかんできた。全くその通りだと思う。突然に父を失ってみるととり取りわけその感が深いのである。

かれは高森家の一人息子として生れたので、当然百姓の跡目を継がなければならなかったが、高校受験の時工業高校への希望を父に洩らすと、今後は科学の時代だ、それもよかろうと父はあっさりゆるしてくれた。卒業してみると成績のよかったかれにはよい就職口が待っていた。当分の間は勤めるもよいがそのかわり日曜日には畑へでろ、いつでも畑へでてやれる準備をしておかなければならんと父は厳格な口調で云ったものである。

文芸

もともと高森家には梨園が五十アール、ミカン園が三十アール、田圃が七十アール程あるが、田圃は人手に任せて、父親は専ら果樹園へ精魂を傾けていた。

省一は卒業するとこの地方切っての大きな電力会社へ就職した。恵まれた日々であったと思う。父のひ護の下で衣食には事を欠かなかったし、当然サラリーを生活の資に供する必要もなかった。父性のあたたかいびょうぶのおかげで贅沢な道草をくったものである。その父が十月の終りに脳溢血で突然に亡くなった。息子はすっかり途方に暮れた。梨園の収穫は終っていたので、その儘ずるずると会社勤めがつづいてきた。ミカンの収穫は人手を雇ってすませたが、今度は梨園の剪定の作業が待っている。これは人任せではできない。漸く息子はまわりから決断を迫られる場にきたことに気づいた。勤めをやめるか、百姓をやめるか。しかし結局、百姓の子は百姓に還らなければならないことを息子は自覚している。そうわかっていながらずるずると二カ月も過ぎ去ってきたのである。その間には母親は息子の将来を心配して親族会議も開いたが、親籍の中においてさえ、当然おやじの跡を継ぐべきだと主張する者と、いまの若い者は百姓をしたがらんきにと温情論を持ちだす者さえあって、最後は息子の自由意志に任されたが、息子はある朝果樹園を見廻っていて、小さな枝の一つ一つにも父円精のあとを認めた時、かれの決心はついたのである。父が生涯をかけた夢を途中で壊してはならないと。だがその日、会社へ行って同僚と並んで机に向かっていると、かれはまたしても自分の決意がぐらついているのを感じた。おかしな話である。会社を辞めてしまえば規模は小さくても明らかにかれ自身が事業主になるはずではないか、同僚へ気をかねたり、誰に分令されることもない。収入だって後二、三年もすれば年収百万円には達するであろう。その収入は課長よりも多く専務よりも多いかも知れない。だのにこの自信喪失ぶりはどうしてだろう。単にペンを握るかわりに鋏を持ち、洋服のかわりに野良着を着るだけのちがいなのに。そのために自分は同僚や課長にひけ目を感じているだろうか、そうではない。それでは社会に対してか、そうでもない。そこでかれはひとり赤くなった。自分が百姓へ転業するために自分のまわりに気持のひっかかりとなる者があるとするならば、それは課長の妹の道子より外にはないと気づいたからである。

道子はこの春短期大学を卒業するとすぐ市内へ最近出来た某証券会社へ勤めている。省一が道子と初めて口をきいたのは、元旦に同僚と課長の家へ年始の挨拶に行った時である。六月に道子は高森家へヤマモモ狩りにきたがその時はもちろん兄達もいっしょだった。しかし秋になるとかれらの交情は時々二人だけの時間を持ち合う程度に親密になっていた。映画へも何回か誘った。格別将来のことを語り合った訳ではないが、どちらも特別の感情を抱き合う一歩手前の状態まできているとは云えた。

野口課長は物解りがいいことで通っている。めったにことを云ったことがない。それでいて適当にらみはきくのである。それは大学出という肩書きと誠実な人柄によるものであろう。かれはまだ若いが、鉢が大きいので年よりもずっと老けてみえる。

課長は信頼のおける一人の社員が、突然に父親を失ったためにすっかり参っているらしいのを知っている。それで省一が辞表をもって現われた時も格別愕かなかったが、しかしすこし困った。

「君これは辞表じゃないか、どうしてだね」

「父が亡くなったので百姓をしなければならなくなりました」

「ふむ、そういえば君は一人息子だったね、ぼくは五人兄妹でずいぶん身勝手な生き方をしてきたが、一人息子というものは窮屈なものだね」俺の父親が亡くなったのも、ちょうど俺がこの青年と同じ年頃だったと課長は思った。

「ぼくも身軽な生き方をしたいのですが、それが出来ないのです」

「百姓をやめることは出来ないのか、今後の君の身分はぼくが保証する。昇進のことも考えている。年度替りには係長の椅子も当てである。」

「そんなに目をかけて頂いてありがたいのですが、ぼくは父と約束したんです」

「生前にか？」

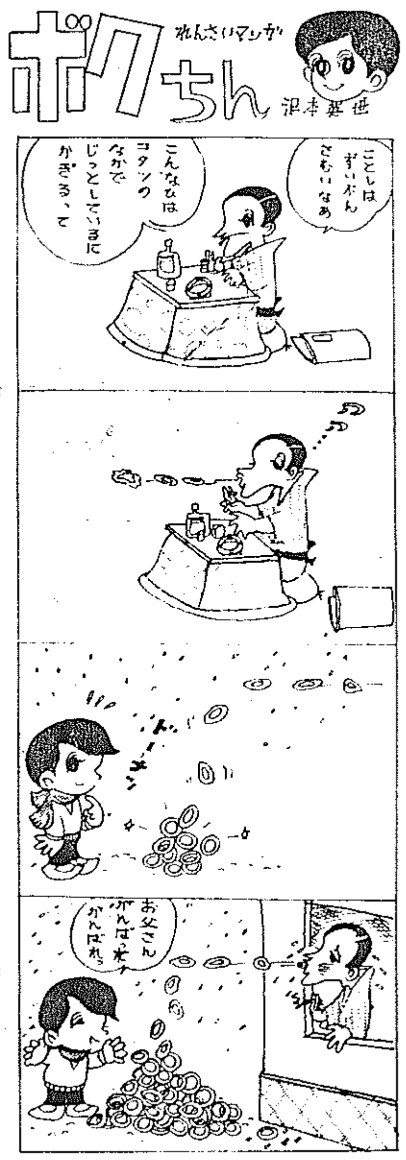
「いいえ、昨日墓の前で、そして決心したんです」

「実行に移さない前なら決心は翻すことができるよ」

「ぼくは死んだ者との約束を反古には出来ません」

「強情だね、そこに君の見どころがあるが、よし今夜は差閊えがあってだめだが、明晩ぼくにつき合ってくれ、ゆっくり話を聞くとしよう」課長はそう云って、無造作に辞表を机の中へ蔵いこんだ。

辞表をだしてみると省一の心にすっかり変化が起こった。周りのすべてが、かれとは甚だ縁遠い冷淡なものに思われてきたのである。まだ同僚の誰も辞意を固めていることは知らない。こんな場合心を割って語れる人が欲しいのだが、遺憾ながらそんな相手は社内にはいない。そうだ、課長の妹なら自分の気持をほんとうに知ってくれ、慰めてくれるだろう。（つづく）



高級御誂服とレデイメード替ズボン
西田洋服店
後免中町（相銀前）電話3063
有線　155—13

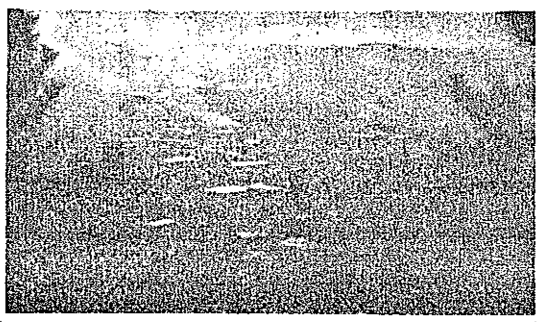
統合堰と茂久川

南海虚子

◙統合堰の涯てしらぬ戸惑いから下流六堰はついに独自の統合に踏みきった。しかし、単に補水だけのことならそれでもよいが、野相の整理と近代農業化とを中軸とした「平野経営」の見地に立てば、六堰統合では全然意義があるまい。日本の主要農産物は国の保護政策で支えられてはいるが、世界的自由経済化の波はもう目前にせまっている、労質の多い旧態そのままの農耕をまだ続けようというのであろうか。

◙宇野から岡山への車窓で彦崎駅の北、興除村を見渡せば、田地はみな一画十アール内外に整然と区切られている。香長平野にコンバインの導入も間近い現在、複雑な水系に狭まれ、小さい田地がヒシメク原始的平野では動きがとれまい。統合堰はこの水系整理の基本となるものだ。したがって主要幹流の配置も深い考慮を払うべきであろう。

開拓地とは同一視できないにしても、何れは区画整理を迫られる時機がきている。相当な投資をしなければ「儲ける農業」は育ってくれまい。


市の北部山頂から平野地帯を眺めると、強くまなこを射るものがある。まるで鏡が光るように鋭い陽光を反射するビニールハウスだ。たくましい生産意欲と冬の大地が金を生むことを物語ってじゅうぶん。

＝写真は上倉の山から・手前は岡豊町＝

◙上下に重なる諸堰は、物部川を同じ母胎としながら互に背を向け、たもとを別つとは現代の悲劇である。

今日の物部川が開通されて以来、むかしから上下で対立し、水論がたえないのは寛政四年の葎れ、郡奉行の差配で山田堰の水越しを一間拡めたことや弘化四年、野市堰を中心に山田堰との間の大論争で、双方群集を操出し数日争い、藩の水越し操作によりことなきを得たことなど、今日こうした因子を温存のまま、対立姿勢をいまだにもち続けているのだ。しかしこの対立を見兼ねた有志諸賢が、最近全堰統合奔走していることは感謝にたえない。ことは南国市勢に懸る基本的大事業であり、市の要施策の一つであるというのに、市はいままで諸堰の懸引きにまかせ傍観的であったのはどうしたことか。

◙南国市のこうした断層を尻目に、中部日本では雄大多面な構想のもと木曽川と伊勢湾とをめぐる岐阜、愛知、三重三県が一致協力してつくった愛知用水がある。こちらでは原始平野のあちこちで無系列補普的に争っている。しかも彼らは、大地を刻み施設を加え、大きなプランが目前に展開されている。"かくて彼れと我、時代格差は富の格差と大きく離れていこう。

時代色盲でも感情過剰でもあるまい。物部上流でのギセイの恵を忘れずに、平野経営の見地からお互協力前進したいものだ。それはそれとして本論に復帰したい。統合堰と茂久川は永らく記載を足踏みしていたが、諸堰統合の成否如何にかかわらず、舟入の解体と茂久川の重要性には変りない。次号から茂久川改装による後免周辺の汚水路解消や都計条件の整理などの試案に移りたい。

（く）（ら）（し）（の）（メ）（モ）
湯どうふの季節

△…これからは湯どうふのおいしい季節です。酒の肴にも最適でしょう。

△…ところで、この湯どうふをおいしくするのは、薬味とタレの工夫によります。

△…例えば、あっさりした味ならしょう油にさらしねぎや、唐辛子などで結構ですが、ウニを日本酒とタマゴの黄味でといたタレもいきます。

△…また、ユズみそ、ゴム酢、ケチャプ、ウースターソースなどいろいろと口に合うよう工夫してみますと一層おいしい湯どうふが食べられます。

今月の税金

一月は、昭和三十七年度県市民税第四期分の納期です。市では納税者の便宜を計るため、市金庫（農協）以外の次の場所で出張徴収をいたします。期限内の納税にご協力下さい。

地区	月日	時間	場所
大篠	1月30日	前9時—後4時	竹中公民館
稲生	〃	前9時—正午	立石公民館
〃	〃	後1時—後4時	西谷消防屯所
十市	〃	前9時—正午	阿戸公民館
〃	〃	後1時—午4時	大小浜公民館
久礼田	〃	前9時—正午	植田公民館
〃	〃	後1時—後3時	領石支所
伊達野 住吉野	1月31日	前9時—正午	住吉野公民館
大篠	〃	前9時—正午	明見公民館

新年俳句会

一月三日　大篠公民館

求婚に騒ぐ胸抱き毛糸あむ　後免町　西岡茶由子
肩に降る木の実に今日の日のぬくみ　福船　和田　幸郎
枯荒野身をやはらげる場とてなし　久礼田　岡崎ひとし
吾子の熱困はげし掌でたしかむ　福船　和田ひでみ
霧流れ空港暮れて冬日濃く　城陵　前田　紫月
初湯にすく総身いとしみ目を閉ずる　大埇　西岡双鳥子
かずら朽ちなほも宵塚支へいる　西淮　山中　日爽
労使握手肪脂に寒星またたけり　福舟　大出　新草
広重の描くに似たり寒茜　金地　島崎　渓一
槌音の止みを待つかに冬日没る　東崎　片岡　光清
薪割れば骨まで疼くひびの掌が　八木　松木　樹翠
郵便夫初日に赫くわが家へ来る　北村塔々子

ブルトーザー施工
吉本鉄工所
南国市日章立田
ETL（日章）26

お見合に
御婚礼に
山崎写真館
南国市後免中町
電話　南国354

毛糸
トーア、スキー
ローレル、カネボー
後免西町　富士屋百貨店
TEL248

ウタカ屋洋服店
本店　高知市上佐橋県交通前　電話（高知）②九二四八番
支店　高知県南国市後免町　電話（南国）　二九六番
工場　高知市浦戸町58　電話（高知）②九二四八番